
授業研究会 MATT

第1章 プロジェクトの概要

1. プロジェクトの名称、目的など

名称 授業研究会 MATT

目的 児童・生徒にとってよりよい授業とは何か。
さまざまな手段、方法を通して研究し、教育現場で活かすこと。

2. 代表者および構成員

・代表者

氏名 倉橋冬馬 国語領域専攻3回生

・構成員

氏名 片山武海 教育学専攻3回生

氏名 美川明日香 幼児教育専攻3回生

氏名 渡邊舞菜 教育学専攻3回生

3. 助言教員

氏名 中俣尚己 (国文学科)

第2章 内容、実施経過

内容：週に一度、模擬授業を行い、撮影する。

授業内容に関して、相互に批判を行い、自身の授業の様子を映像で見返す。

7月 毎週木曜日の授業研究

8月 不定期の授業研究

9月 不定期の授業研究

10月 毎週木曜日の授業研究

11月 毎週木曜日の授業研究

12月 毎週木曜日の授業研究

姫路城でのARによる実物教授の方法研究

第3章 成果

1. 授業力の向上。
2. 授業分析シートの作成
3. ARの有用性への気付き

第4章 まとめ、反省、今後の展望

1. まとめ

大学の演習では45分、50分単位の模擬授業をする機会が多くはない。しかし、小集団で授業研究を行うことで、様々な時間設定で模擬授業を行うことができた。

授業の様子を撮影し、後程映像を見返すことは、客観的に自分の授業を分析するために有効な手段だと言える。

教育界でICTの活用が盛んに取りあげられているが、ARは十分に教材として活用できると考えられる。

2. 反省、展望

授業分析の観点は各模擬授業で考えられたものの、それらを分析シートにまとめるまでに時間を要したため、分析シートに関する作業を定期的に進めるべきだった。

また、新学習指導要領に対応した観点を充分に取り入れようと考えていたが、新学習指導要領を吟味することができなかった。

研究内容を大学全体に発信する機会が本発表でしか得られなかったため、広報を積極的に行うべきであった。

AR技術の有用性に気付くことはできたものの、姫路城を訪れるのが遅くなってしまったため、模擬授業で実際にARを用いることができなかった。模擬授業は今後も続けるため、ARを用いた模擬授業を実践したい。

<参考・引用文献>

澤井陽介『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』（東洋館 2017年）

栗田正行『「発問」する技術』（東洋館 2017年）

加藤辰雄『誰でも成功する板書のしかた・ノート指導』（学陽書房 2013年）